

第2章 小木町の地勢と歴史

第1節 小木町の地勢

佐渡島の大地形 佐渡島は新潟市の北西約35kmに位置し、面積は約855km²、周囲は約280kmの日本海側最大の離島である。地形は標高1,172mの金北山をはじめとする大佐渡山地、標高645mの大地山をはじめとする小佐渡丘陵があり、その間に位置する国中平野に大別される(図2-1-1)。佐渡島の大地は、数百万年の時間をかけて海底が隆起したことで誕生した。隆起運動にともない形成された海成段丘の段丘面は、農地として人々に利用されている。

火山活動と金銀鉱床の形成 佐渡島の土台は、約3,000～2,000万年前に起こった陸上の活発な火山活動によって流れ出た溶岩や噴出物により形成された。さらにこの火山活動の産物として、鉱山の基盤となった金銀鉱脈が形成され、大佐渡地域に多く分布している。これら金銀鉱脈は地表や海水などから供給された地下水や、もともとマグマの中に含まれていた水が地下深部でマグマの熱によって加熱され、高温の熱水となり、この熱水に周囲の岩石中に含まれる金や銀が溶け込み、断層や地下の割れ目を通して地表近くまで上昇し、温度と圧力が低下することで溶けていた金属成分が晶出、沈殿したものである。佐渡島における金銀産出の背景には、活発な火山活動が起因している。



図2-1-1 佐渡島の大地形と小木半島

小木半島の地形 小木半島には、約1,400～1,300万年前の海底に噴出した火成岩類(小木玄武岩層)、硬質頁岩(鶴子層)および段丘堆積物が分布している(図2-1-2)。小木半島では最高地点の鶴ヶ峰(193.1m)周辺が最高位の段丘(第1段丘)にあたる。以下、第2～第5段丘(更新世段丘)、完新世段丘、および享和2年(1802)の小木沖大地震(以下、小木地震)の時に最大約2m隆起した隆起波食台からなる。玄武岩からなる黒褐色の岩肌と常緑樹林とが織りなす海岸沿いの景観は美しく、独特であることから、昭和9年(1934)に「天然記念物及び名勝佐渡小木海岸」として国の指定を受けており、平成25年(2013)に日本ジオパークに認定された佐渡ジオパークの見どころのひとつである(図2-1-3)。

小木地震と島の隆起、波食台の形成 小木から沢崎までの海岸には高さ約1mの段が見られる。幅は狭い所で約1m、広い所で数十メートルに及び、背後には高さ20m前後の崖がそびえる。この段は波の侵食作用によって形成された平らで浅い海底面が、前述の小木地震によって隆起したものである(最大隆起量は宿根木の213cm)。このような隆起運動は現在も続いており、数千年に一度の割合で地震が繰り返されることで佐渡島全体は隆起を続けている。

小木半島全体の波食台が全て同じ深さの海中で形成されたと仮定し、隆起波食台の海面からの高さを

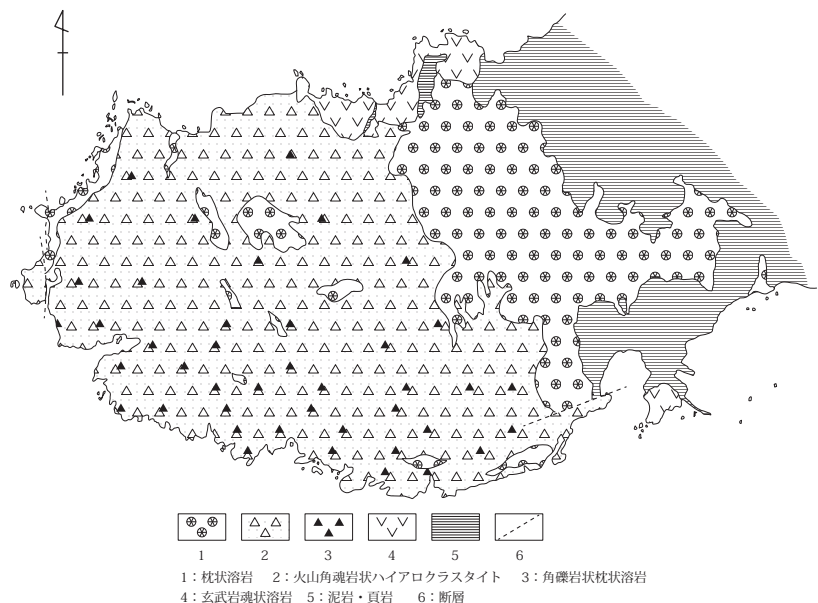


図2-1-2 小木半島の地質分布図

計測すると、小木半島の南海岸の海面からの高さは北海岸に比べ、より高い数値を示す。つまり、地震によって小木半島全体が傾いて隆起しており、小木町のある南海岸の隆起量が高いことを表している。

小木半島の地形と生業・生産 小木半島の漁業のひとつに、「たらい舟」と呼ばれる大桶を半分にした形状のはんぎりに乗っておこなう磯ねぎ漁が挙げられる。地震による海底の隆起によって形成された岩礁地帯は水深が浅く、入り江も狭いが、海藻や魚介類は豊富であり、そのため、こうした磯ねぎ漁が発展したと考えられる。

また農業では、平坦面である小木半島の段丘面を田畑として主に利用する。一例をあげると、小木と宿根木の間位置する琴浦地区の畑では、主にサツマイモが栽培され、サツマイモの加工品である「いももち」は、小木半島の特産品でもある。サツマイモは段丘崖を掘削して造った「室（むろ）」に貯蔵する。大昔に海底火山から噴出した溶岩の欠片等が降り積もって形成された小木半島の岩石は、比較的柔らかく、容易に岩を掘り進めることができたため、このように貯蔵庫として利用することができたのである。

小木町の地形・地質 前述のように、小木半島は主に海底で起こった火山活動により形成され、その後、島の隆起運動や風化侵食作用により現在の地形が形成された。小木町周辺もこれらの影響を受けている。

江戸時代の小木町が金の積出港や風待ちの港として成立し、発展した背景には、内の潤と外の潤を隔てる城山の存在が多分に起因している。城山の岩床

は、珪藻質泥岩の地層の中に入り込んだ玄武岩である。玄武岩と泥岩の接触面には、マグマの一部がちぎれ、未固結な泥岩の地層の中に入り込んだり、マグマの熱で凝灰質泥岩を溶結させたりした部分が見られる。城山で見られる玄武岩は泥岩の地層中に低角で入り込んだため横長に伸びており、長い年月の中で侵食され、現在は岬となっている。城山が海に突き出した地形をなしているのは、城山先端の硬い玄武岩が柔らかい泥岩層を海の侵食から守っているためと考える。

この城山の両岸に形成された潤（入り江）は、西側を「内の潤」、東側を「外の潤」と呼称する。両潤は水深が異なり、内の潤は外の潤に比べて浅いという。次節で詳述するように、この水深の差は、江戸時代の両潤の利用形態や港町としての土地利用、土木事業等に大きく影響している。内の潤および外の潤に面して形成された小木町は、こうした地質および地形的背景によって、天然の良港として江戸時代に町立てされ、その後、大いに発展した港町であり、小木町の地割や町並の基盤として、地形や地質も見逃せない要素といえる。 (市橋弥生)

参考文献

- ・佐渡市・佐渡市教育委員会『名勝佐渡海府海岸・天然記念物及び名勝小木海岸保存活用計画書』、2016年。
- ・佐渡市『佐渡相川の鉾山都市景観 保存調査報告書』、2015年。
- ・佐渡市教育委員会・佐渡ジオパーク推進協議会『佐渡島の自然—ジオパーク解説書—』、2017年。
- ・佐渡ジオパーク推進協議会編『よくわかる佐渡ジオパーク 自然とひとの暮らし』、2022年。



図 2-1-3 小木海岸の景観

第2節 小木町の歴史

1. 小木町の形成前史

先史時代の小木半島 小木半島のほぼ中央、標高約175mの丘陵地に、縄文時代前期末葉～後期初頭の集落遺跡「長者ヶ平遺跡」(国指定史跡)がある。同遺跡では複数の住居跡が確認されており、出土した黒曜石や土器文様などから東北、北陸、中部、関東などとの交流や影響が認められる。また、標高約100mに位置する海蝕洞の「岩屋山石窟遺跡」(県指定史跡)からは、縄文時代早期中葉頃の佐渡最古の縄文土器が出土している(図2-2-1)。縄文時代晩期に入り寒冷化が進むと、海岸に近い遺跡は岩陰や洞穴を利用して生活を営むようになる。小木半島の海岸は、小さいながらも生活に適した入り江を備えた地域が多く、海流に乗ってきた先史時代の人々はこのような半島の入り江にたどり着き、そこから広範囲に活動をおこなっていたものと考えられる。

古代・中世の小木 奈良時代には佐渡中央部の国中平野を見下ろす高台に国分寺が置かれた。佐渡国は、雑太・加茂・羽茂の三郡に分かれ、小木半島は羽茂郷に属した。

中世に入ると、地頭の筆頭格・守護代の本間氏が勢力をもち、小木半島の台地は一族の羽茂本間氏の領地となった。羽茂本間氏の支配は、天正17年(1589)の上杉氏の佐渡攻めまで続き、小木城山と元小木の海潮寺付近に出城が置かれていた。

また、佐渡は奈良時代より遠流の島となり、鎌倉から室町時代には、順徳上皇、日蓮、世阿弥らが配



図2-2-1 岩屋山石窟遺跡(県指定史跡)

流されて佐渡の地を踏んでいる。文永11年(1273)に日蓮の積免状を持参し、元小木に流れ着いた日蓮や文和4年(1355)に直江津を經ち、時宗の布教に訪れた遊行上人など、この頃の中心は小木町より西側にある元小木や宿根木であった。小木町には浜屋があるのみで、現在の内の潤西端に位置する「人置(沖)の潤」と呼ばれるところに小船がわずかに着く程度であった(図2-2-2)。

2. 近世の小木町

小木港の成立 慶長6年(1601)、佐渡は徳川幕府の直轄地となり、金銀山の開発が進められた。慶長8年(1603)、大久保石見守長安が佐渡代官に任命され、翌年には相川に陣屋(のちの佐渡奉行所)が建てられ、計画的な町立てが展開された。鉱山に関わる諸職が日本各地から佐渡へと渡り、それまで5～6軒の寒村であった相川の人口は4～5万人へと膨れあがり、国内有数の鉱山都市へと変貌した。

慶長9年(1604)に、信州筑摩郡榑井村から長安の家臣であった原土佐守宗勇が代官として小木に着任し、元小木の弁天崎の台地に築かれた小木城に入城した。宗勇は、小木から西三川までの村々の支配のほか、港の管理を担った。慶長11年(1606)には、港に荷揚げされた物資の十分の一を税として徴収する十分一役所(上の番所)が置かれ、その近くには物資の値決めをする直打場が設けられた。

また、慶長14年(1609)には、長安の寄進により、佐渡金銀山の繁栄と海上輸送の安全を祈願して木崎神社が建てられ、港町としての機能が整えられていった。



図2-2-2 人置の潤(昭和40年代)

内の澗と外の澗 江戸時代に入り、小木港が整えられていった背景には、前節でも述べたように、東西約 350m、標高約 43m を有する陸繋島の城山を介して、「内の澗」と「外の澗」と呼ばれる 2 つの天然の澗（入り江）が存在したことが影響している。内の澗に 150 艘、外の澗に 200 艘の船が係留できたとされる（図 2-2-3）。

慶長 19 年（1614）、小木港が渡海場に定められ、5 人の問屋（口屋役人）が置かれることとなった。羽茂郷の地頭家来や重立であったとされる 5 人の問屋衆は、運上の取り立てをおこない、上の番所付近の本町筋に居を構えていた。翌年の元和元年（1615）には小木町が町立てされた。扇を広げたようなかたちをした円弧状の内の澗の地形に沿うように、西から田町（現在の琴平町）、上町（幸町含む）、上立町（現在の稲荷町）、中町、中立町がつくられ、現在の本町通り沿いの町場の骨格が形成された（図 2-2-4）。



図 2-2-3 明治 30 年頃の家並みと内の澗



図 2-2-4 昭和 40 年頃の埋立前の内の澗

金銀の積出港 元和 2 年（1616）、小木の対岸にあたる越後国の出雲崎が幕府の直轄地となり、代官所が置かれた。これ以後、佐渡で産出した金銀は小木港から出雲崎港へと渡り、北国街道を經由し江戸に運ばれた。元和 6 年（1620）には、佐渡奉行は金銀輸送用の櫓数 70 挺立の官船 2 艘、20 挺立の小早船 2 艘を建造している。金銀は相川から内の澗側に設けられた御座の澗へと運ばれ、一旦、木崎神社に納められて越後行きの日和を待った。最盛期には年 10 回ほどの上納金輸送があったといわれる。

寛永 8 年（1631）、佐渡奉行の竹村九郎右衛門嘉理は小木港を金銀の積出港に定め、相川と小木とを結ぶ街道の整備をおこなったほか、相川にあった光善寺を小木へ移すなど、港や町場の開発に力を注いでいる。しかしながら、この頃の小木番所の徴税額は銀 13 貫 967 匁であり、相川の 4 つの番所の総額、銀 374 貫 854 匁 1 分に対して、10 分の 1 以下であった。この頃の小木港は、諸財貨の移入港ではなく、主として金銀の積出港として幕府の需要に答えていたようである。

西廻り航路の開設 寛文 12 年（1672）に、幕府は出羽国最上郡の天領米の江戸輸送を河村瑞賢に命じ、西廻り航路が開拓された。西廻り航路は、日本海から瀬戸内海を經由して大坂・江戸へと至る航路で、物流の拡大にともない、のちには北海道（松前）まで延伸した。俗に「北前船」と呼ばれる帆船が日本各地を駆け巡り、産物を運んで地方に産業や文化

を根付かせた(図2-2-5)。航路開設にあたり、小木港が寄港地に定められ、酒田から能登へと向かう廻船などが停泊することとなった。

小木港は2つの澗を有する天然の良港であったが、暴風にみまわれた際には急いで船を城山の岬を廻航して反対側の澗に移動させなければならず、危険がともなうことも多かった。内の澗は南西風(ヤマセ)に弱く、外の澗は北東風(ダシノ風)に弱いため、慶安2年(1649)8月23日には大風が吹いて、廻船400艘余りが破船したという記録が残っている。

汐通しの堀切 瑞賢は、寄港地指定の前年に小木港の港湾整備にとりかかっている。寛文11年(1671)8月、城山の付け根付近に内の澗と外の澗とを繋ぐ「汐通しの堀切」普請が開始された。開削工事には2,667人の手間がかけられ、総延長は20間(36m)で、両澗を繋ぐ堀切には7間半(14m)の木橋が架けられた。これによって両澗に係留する船の安全性と利便性の向上が図られた。廻船は時代が下るにつれて大型化が進み、水深が浅い内の澗よりも水深が深い外の澗への利用頻度が次第に増えていった。町場も徐々に内の澗側の^{しもまち}上町から外の澗側の^{すえひろちよう さかえちよう いりふねちよう}下町へと伸長していくこととなった。現在の^{すえひろちよう さかえちよう いりふねちよう}未広町や^{さかえちよう}栄町、^{いりふねちよう}入舟町といった辺りはこの頃に形成されたとみられる。

下町発展にともない、下町側の商人から再三にわたり、佐渡奉行に対して「^{しも}下の番所」の建設願いが出された。申出は番所の立地や荷抜きなどを理由に却下されるも、船の大型化や下町の興隆によって、天和2年(1682)に汐通しの堀切は埋め立てられ、下の番所が建てられることとなった。



図2-2-5 平成10年に復原された北前船「白山丸」

權益を争う上町と下町の争いはその後も繰り返された。埋立から21年を経た元禄16年(1703)8月に発生した暴風により96艘が破船したことを受け、宝永元年(1704)に再び堀切が開削された。享保元年(1716)には、外の澗側への土砂流入量の増加などにもない、堀切は再び埋め立てられてしまった。その後、天明8年(1788)には、全国的な廻船業の発展にともなう入港船の増加により再び堀切が開削された。このように汐通しの堀切は開削と埋立が繰り返されたが、結果的には後述の小木地震の発生を経て、問題は解決されることとなった。

小木地震と三味線堀 享和2年(1802)11月15日、小木地震が発生した。震源地は小木沖、マグニチュードは6.5~7.0と推定されている。この地震による被害は160ヶ村に及び、倒壊家屋732軒、損壊家屋1,423軒、焼失家屋328軒、死者19人に及んだ。小木町では8ヶ所より出火し、人家328軒、土蔵23ヶ所、寺院2ヶ寺が焼失、死者18人であった(『佐渡年代記』)。死者の数をみても、島の中でも震源地に近い小木町に被害が集中していたことがわかる。また、この地震によって海底や陸地が1m余りも隆起したと伝わり、内の澗の海岸線は40m余りも後退し、新地がうまれて寄港する船舶は町場に近接できなくなってしまった。内の澗と外の澗を繋いだ汐通しの堀切も海が干上がり陸地となって、機能が果たせなくなった。

こうした問題を解決するため、地震から2年後の文化元年(1804)、内の澗にこれまでのように町場の近くまで小船が往来できるような堀が築造された(図2-2-6)。堀割(水路)は^{ほりわり}円弧状の地形に沿うように、長さ125間(225m)、幅10間(18m)、深さ6尺(1.8m)で開削され、その東西両端には20間(36m)四方の^{しやみせんぼり}柵形が造られた。三味線の棹のような形状の水路と三味線の^{しやみせんぼり}胴にも似た柵形により「三味線堀」と呼称された。約1年3ヶ月にも及んだとされる大規模な開削工事により、港機能の改善が図られた。

浜町の形成 文政7年(1824)8月11日には、田町から下町まで7ヶ町が焼失する大火(俗に阿弥陀院火事という)が発生した。多くの家屋のほか役家も類焼し、被災者は住まいを失い困窮を極めた。

また、この頃になると完成から20年を経た三味線堀は、度重なる高波や河川からの土砂流入によって堀が埋まり、地形が変わって機能が果たせなくなっていた。そのため、文政9年(1826)には堀が埋められ、埋立地は「^{はまみとりぼ}浜見取場」と呼ばれる質の悪い田地となった。この状況を知った佐渡奉行の泉本正助忠篤は町割計画を立て、この浜見取場に^{はままち}浜町浜側を造った。宅地化された土地は奉行の名を採って^{いづみちよう}「泉町」と呼ばれて被災者らが移り住んだ。文政11年(1828)には堀跡であった部分に^{あずまちよう}浜町山側の町割も始まり、「^{あずまちよう}東町」と呼ばれた。ともに天保2年(1831)までに宅地化が完了した。

このほか幕末から明治時代初頭にかけて、産業の発展や人口の増加にともない、小木地震によって陸地化した部分の開拓が進み、内の^{のぼりちよう}澗側の登町や外の^{あまひちよう やまもどちよう}澗側の旭町、山本町にも宅地が形成され、町場が拡大していった。

3. 小木港の賑わい

廻船業と積み荷 江戸時代に日本海を往来した廻船は運賃積みではなく、各港で産物を売買する買積

みが主であった。当時の新潟港は河港であり、風の影響を受ける場所であったことから、米などを積み込むにはまず小木港に立ち寄り、入港順を決めてからでない^と新潟港に入れなかった。そのため、小木港には多くの船が出入りした。また、日本海の中央部に位置する小木港は、北海道・東北地方から西日本方面へ上っていく廻船の中継地としても使われ、港町として発展していった。

文久3年(1863)の積荷記録によると、行きは米を中心に関西方面へ運び、帰りは塩を中心に運んでいる(図2-2-7)。天候に左右される廻船の往来時期は、3月~9月頃までであり、3月に小木港を発ち、新潟、寺泊、出雲崎で米や干鳥賊を積み込んだのち、越中、能登、加賀の港に立ち寄って、米や干鱈などを仕入れ、兵庫、大阪で売り払っている。帰り荷は越後、越中、能登などの商人に依頼された塩やくり綿、玉砂糖、土佐半紙などを積み、各港に寄港しながら約1か月後に戻っている。北前船によってもたらされた他国の物資や文化は、小木の港を経由して島の内外へと伝わっていった。

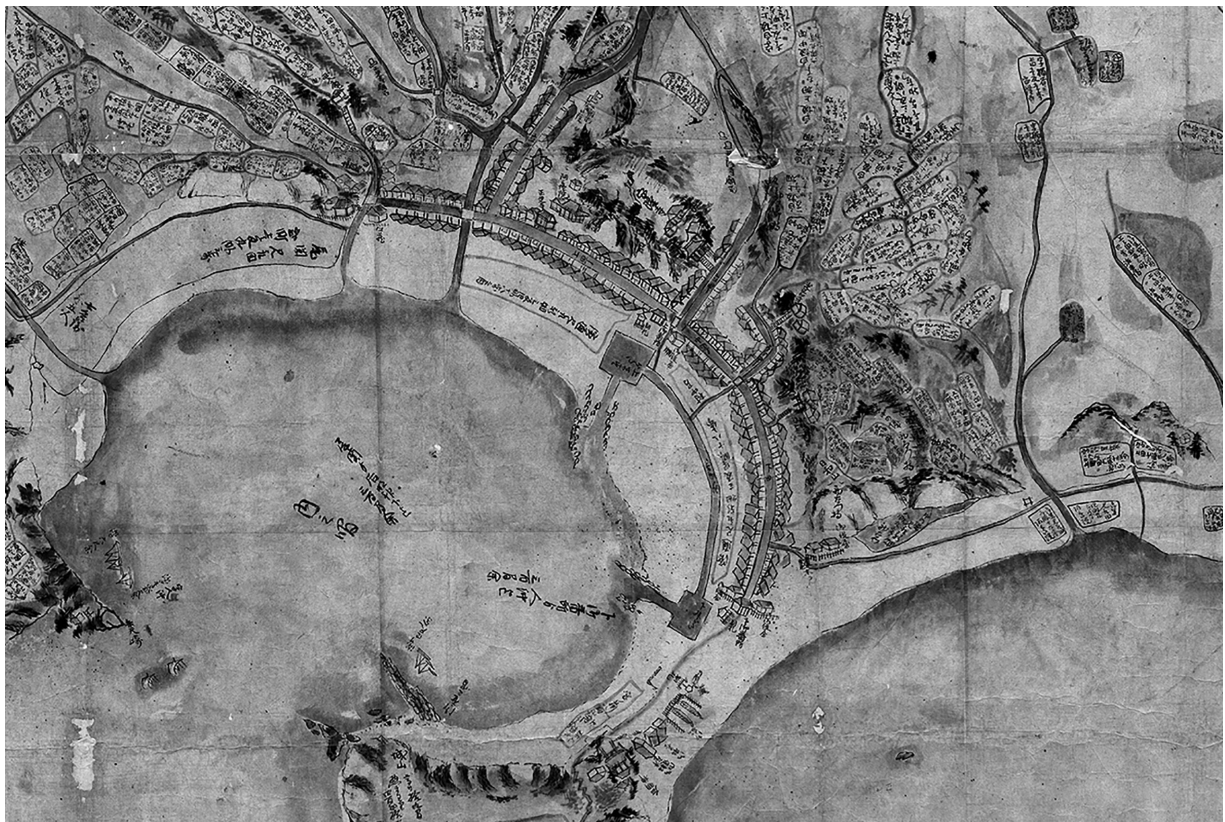


図2-2-6 三味線堀(「小木湊古絵図」、佐渡市指定文化財、個人蔵、一部拡大)

問屋衆の隆盛 小木港の繁栄ぶりは、問屋の数にも表れている。開港当初（慶長期）の問屋数は5軒であったが、西廻り航路の寄港地となった寛文12年（1672）に10軒となり、宝暦元年（1751）には20軒となった。同年は奉行への訴えによって佐渡産物の他国売買が解禁された年であり、船宿14軒のうち10軒が問屋に昇格している。問屋は番所の業務を補助しながら、港に入った船頭の宿を担い、他国からの商品の取り引きをおこなった。

当時の様子は、小木町で江戸初期から廻船問屋を営んだ和泉屋（桃井家）の入船帳で確認することができる（「近世の小木半島」）。この記録は、和泉屋が享保14年～明治23年（1729～1890）までに扱った入船状況を示しており、これによると和泉屋が取り扱った総船数は1,414艘に及んでいる。最も多くの入船があったのは、幕末から明治初期にかけての30年間で、682艘と全体の約半数を占めるに至っている。そのほかでは、佐渡産物の他国出しが許された宝暦期以降や北前船交易が本格化した文化・文政期に多くの入船がみられる。また、国別の廻船数をみると、越前の318艘を筆頭に以下、摂津199艘、加賀174艘、出羽106艘、周防97艘、丹後84艘、出雲82艘、越後63艘、佐渡48艘、長門37艘と続いている。小木港へ入船をした総国数は41ヶ国に及び、関東地方と海の無い国を除けば、ほとんどの国から出入りがあったことがわかる。小木町には紀伊ノ国屋、筑前屋、三河屋といった各国の国名を示す屋号が今も数多く残っている。

小木港へと寄港し、陸に降り立った海の男たち



図2-2-7 佐渡から運ばれた産品（佐渡国小木民俗博物館所蔵）

表2-2-1 小木の産物と移入品

小木町の産物				小木港の移入品			
品目	金額			品目	金額		
	両	分	朱文		両	分	朱文
干鳥賊・塩鳥賊	6,374.	1.	0, 248	新・古綿	6,278.	2.	1, 60
こうなご粕	878.	1.	0, 148	砂糖類	5,415.	2.	3, 216
箱細工類	828.	3.	2, 272	布木綿	4,582.	3.	1, 312
廻船用苫・				藍玉	3,330.	0.	0, 0
浮木他道具類	423.	1.	1, 12	酒	2,674.	1.	0, 248
石細工類	187.	3.	3, 312	塩	1,534.	0.	0, 0
竹細工類	133.	2.	1, 184	鉄	1,228.	2.	1, 60
藁細工類	113.	3.	1, 312	油	1,100.	0.	0, 0
干鯛	76.	3.	0, 388	たばこ	1,057.	0.	2, 120
塩魚類	75.	0.	2, 124	諸紙	880.	0.	0, 0
				生・晒蠟	809.	2.	3, 184
				産類	342.	3.	1, 312

※『新潟県史通史編5 近世3』、p.253所収図より引用。元図は慶応三年「佐州六港図識」（東京大学資料編纂所所蔵）から作成される。

は、航海の無事を祈願し神社を参拝したあと、日和を待ち、次の出航に備えて宿へと向かった。船頭は問屋へ泊まり、船乗りである水主らは付船宿に泊まった。付船宿には、船乗りの遊び相手をする飯盛女がいた。天保13年（1842）の記録には、飯盛女は相川26人、小木74人とあり、このことから小木港の賑わいが垣間見える。

産業の変遷 小木町の産業は港とともに変遷してきた。江戸から明治時代にかけての人口は3,000人前後で、限られた後背地しか持たない港においては、社会経済の主軸を担うような産業は生まれなかった。そのような環境ではあったが、慶応3年（1867）の『佐州六港図識』（東京大学史料編纂所所蔵）には漁船145艘が記録され、干魚などを産するほか、箱細工類が多く生産されている（表2-2-1）。箱細工とは主に船筆筒のことで、船頭らが大切な書類や金品などをこの船筆筒に保管した。明治35年（1902）の『小木町納税一覧』（佐渡国小木民俗博物館所蔵）には箱大工6軒が記されており、透かし彫りの金具を多用した堅牢な小木の船筆筒は、酒田や三国と共に一大産地となった（図2-2-8）。

廻船業に衰えが見えはじめた明治時代になると、小木町の人々は廻船業とは別の資金源を模索するようになった。船持ちの商人や宿屋が呉服屋や藁細工品を商売とする荒物業に転業したり、アケビヅル加工や養蚕事業を始めたりするなど、職業を変えて時代の変化に対応しようとした。

『小木町納税一覧』によれば、小木町で302軒の納税者が記されている。多いものから挙げると、漁業73軒、採藻51軒、鱈漁業39軒となり、半数以上が漁業従事者であった。このほか、旅人を受け入れるものとしては、旅人宿8軒、木賃宿2軒、飲食店17軒、理髪7軒、湯屋4軒などがあり、まちの規模から比しても、この頃はまだ廻船に関係する生業が多くみられた。大正15年(1926)の『小木町屋号人名簿』(佐渡国小木民俗博物館所蔵)では、611軒が確認できる。多いものから挙げると、箆業108軒、漁業75軒、日雇55軒、大工26軒となり、この頃になると箆業が突出する。このほか芸者10軒、貸座敷8軒、旅人宿7軒、料理屋10軒などがみられ、この頃はまた港の賑わいが感じられる。

しかし、昭和15年(1940)になると芸者1軒、貸座敷2軒、旅人宿5軒とその数が大きく減少している。この記録には総数443軒が記されるが、最も多いのが竹細工の93軒で、漁業37軒、無職30軒、日雇26軒と続いている。竹細工は箆業の16軒を加えると109軒となる。この数は、まち全体の約25%を占めるほどであり、当時の竹細工産業の興隆した様子が確認できる。

小木町の竹細工 明治25年(1892)刊行の『北溟雑誌』によれば、天保2年(1831)、小嶋屋の風間与作が箆作りをはじめたという。小木町が廻船で繁栄している最中であつたため、同時期に箆作りを始める者はいなかったが、港の衰退とともに徐々に竹細工を始める人が増え、明治中頃には数戸ほどであつた箆職人は、大正時代には70戸200名ほどに



図2-2-8 船箆箱(帳箱、佐渡国小木民俗博物館所蔵)

もなつた。明治43年(1910)には佐渡郡竹細工講習所ができ、昭和5年(1930)には小木町でも講習会がおこなわれている。米揚げ箆や縄籠などが製作されたが、昭和元年(1926)から昭和17年(1942)頃にかけては買物などに使用する手提げの御用籠が全盛期となり、「佐渡御用籠」と呼ばれて、主に北海道へ出荷された。竹は南佐渡を中心に島内各所から採取されていたようである。

昭和35年(1960)頃からは、蕎麦揚げ箆の製作が盛んとなり、多くの生産者が蕎麦揚げ箆の製作に転業し、大小様々な大きさを製作販売するなど、竹細工は小木町の基幹産業へと成長を遂げたが、戦後に広まったビニール製品やプラスチック製品の普及により、廃業する者が多くいた。その後も昭和60年頃まで盆箆の製作が続けられてきたが(図2-2-9)、生活様式の変化により今では数戸が営むのみとなり、竹林の荒廃も進行している。

4. 近現代の小木町

港の変化 安政元年(1858)、幕府により対外貿易用として新潟港が日本の五港のひとつに指定された。明治元年(1868)には夷港(両津港)が開港し、明治5年(1872)に新潟-夷間に新潟丸が就航した。明治9年(1876)には相川県が新潟県に編入され、明治19年(1886)に両津-相川間に県道が敷設された。

『北溟雑誌』によると、明治23年(1890)の入港船数は、小木港112艘、夷港361艘であつたが、明治25年には小木港63艘、夷港548艘となり、夷港への入船が増加している。新潟港の発展にともない、小木港よりも距離の近い夷港が使われるよう



図2-2-9 盆箆作り風景

になり、小木港へ入る船は次第に少なくなっていった。明治27年(1894)の日清戦争以後、和船から汽船への入れ替わりによって、北海道・東北方面からの船は小木港に立ち寄ることなく、他の港に直接向かうようになった。

明治34年(1901)には小木町と岬村が合併して小木町が発足したが、国内に広まった鉄道の敷設、電信の発達などの近代化によって、江戸時代に佐渡第一を誇った小木港の地位は、次第に夷港へと移り変わっていくこととなった。

明治37年の大火 こうした社会的変化の中で、明治37年(1904)8月23日、小木町は大火にみまわれた。午後7時頃に末広町付近で発生したといわれる火災は瞬間に燃え広がり、人家441戸、土蔵30軒が焼失した。当時の新潟新聞の記事によると、鎮火は翌午前3時とあり、消火までに約7時間を費やした。町場範囲のおおよそ半数もの家屋が焼失し、役場や郵便局などの公的機関も失い、小木町は大打撃を受けることとなった。記事には罹災者らに対して役場前で炊き出しをおこない、食料や小屋掛料の救済を受ける者は142戸にのぼると記されている。この事態を受けて、9月には天皇皇后両陛下から金五百円の救出金が下賜されている。

町の復興にあたり、各地に点在していた貸座敷は浜町に集約されることとなった。また大正2年(1913)には、それまで2間余りであった本町通りの道幅を4間に拡幅することが町議会で決定されるなど、町の再編が実行されている。

『建物届綴』にみる大火範囲 佐渡国小木民俗博物館には、小木町各戸の所有建物の届出書をまとめた『建物届綴』が保管されている(図2-2-10)。大火以前の申請年をもつ届出書も含まれ、小木町の大火前後の町家変遷を知る上でも貴重な史料である。

この『建物届綴』のなかには、大火によって焼失または類焼したことを記す「建物焼失届」や、焼失後に再建したことを記す「建物届」や「建物新築届」が合計134件分残されている(焼失と新築の両届出書がある同一地番も含む)。この届出書をもとに、焼失または類焼家屋が建つ敷地と、大火直後の明治末年までに新築された家屋が建つ敷地をまとめる

と、おおよその被災範囲があきらかとなる(巻末図版PL.39)。大火では火元といわれる末広町から、西は上町付近まで、本町通り沿いを中心に家屋が被災したとみられる。加えて、『建物届綴』には東町や泉町に関する届出書が欠落している可能性が高いことや、届出件数が新聞報道の焼失戸数や先述の救済戸数には満たないこと、また大正期や昭和前期に遅れて再建した家屋もあると考えられるため、実際の被災範囲はさらに広がるものと想定される。

大工数の変遷 『小木町納税一覧』等の史料では、大工数は明治35年が15軒であり、大正15年では26軒、昭和15年では16軒と推移し、大正期に大きく増加している。大正15年の26軒には屋根葺きや左官の軒数が含まれる可能性はあるものの、これは大火後の復興に際して、他業種からの転職者の増加や他所の大工が臨時的に居を構えたとも想像できる。そして昭和15年頃には町場の復興も一段落したのであろう。

戦後の開発 小木航路の初出は明治14年(1881)に小木―出雲崎間を航行した占魁丸とされる。その後、昭和27年(1952)には小木―直江津間および小木―新潟間に定期船が就航した。昭和45年(1970)には柏崎(不定期)、昭和50年(1975)には能登にも就航した。昭和40年代からの離島ブームにともない観光客は増加し、小木町でも民宿や旅館などの宿泊施設、土産物屋などの店舗が増え、港も大いに賑わった。このほか、小木港から沢崎までの小木海岸を巡る観光船の運航や、たらい舟の乗船なども開始され、観光地化に拍車をかけた(図2-2-11)。

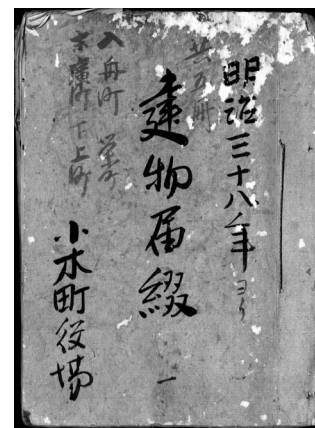


図2-2-10 『建物届綴』表紙(佐渡国小木民俗博物館所蔵)



図 2-2-11 昭和 40 年頃の小木町パンフレット

また昭和 30 年代から始まった高度経済成長期において、小木町では「三み政策」が展開された。「三み」とは「港・道・水」の頭文字であり、この 3 つを整えていくことが、町の悲願となった。

昭和 39 年（1964）、外の潤の埋立工事が竣工した。事業費 1 億円、3 年を費やした工事によって約 20,000m² が埋め立てられた。内の潤は、昭和 26 年（1951）に小木漁港となり、昭和 44 年（1969）から埋立工事がおこなわれた（図 2-2-12）。工事は昭和 47 年（1972）に完成し、みなとまち まつはまちよう港町や松浜町が形成され、埋立地には小木町役場（現小木行政サービスセンター）が新築されたほか、宅地は 65 世帯に分譲された。また、昭和 48 年（1973）からは小木町一沢崎を結ぶ主要地方道佐渡一周線（県道 45 号線）の拡幅工事もおこなわれ、琴平神社が移築され、周辺の一部の町家は軒切や曳家がなされた。昭和 49 年（1974）には、小木港が直江津港・両津港に次いで県内 3 港目の重要港湾に指定された。

昭和 58 年（1983）には、小木港埋立事業が町議会で議決され、現在の外の潤の海岸沿いである海岸通りの埋立工事が始まり、昭和 60 年（1985）に完成した。同年には佐渡汽船小木港旅客ターミナルビル



図 2-2-12 昭和 47 年頃の小木港

ルが竣工し、平成元年（1989）には高速船「ジェットfoilみかど」が就航するなど、佐渡の 100 万人観光を牽引した。現在も島民の生活航路や南佐渡の玄関港として、直江津港を中心に港を繋いでいる。

まとめ 以上のように、中世の小木は小船がわずかに着く程度の入り江であったが、慶長 9 年以降、金銀の積出港として内の潤に面して港町が整備され、寛文 12 年の西廻り航路開設以降は、天然の良港である内の潤と外の潤を中心に、港機能を変遷しながら廻船業や問屋、船宿を営むなど、風待ちの港として大いに繁栄した。明治中頃からの廻船業の衰退で、生業の転換も生じ、竹細工などの手工業が盛んとなり、町場の半数が焼失した明治 37 年の大火で大きな被害を被ることとなったが、その後の町の復興によって、今の町並が成立している。

小木町は、時代の波にさらされながら、港とともにこれまで歩みを進めてきた。その紆余曲折を繰り返してきた風情と名残は、今も町の各所に息づいている。（井藤博明・中川磨）

註

1. 貸座敷とは飯盛女相手の遊興場所のことで、江戸期には小宿や付船宿と呼んだが、明治 5 年の廃娯令により貸座敷と称した。

参考文献

- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 村の歴史 上巻』1973 年。
- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 村の歴史 下巻』1974 年。
- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 史料集 上巻』1976 年。
- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 史料集 下巻』1977 年。
- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 上巻』1979 年。
- ・小木町史編纂委員会編『佐渡小木町史 下巻』1981 年。
- ・小村式「近世の小木半島」、新潟県教育委員会『新潟県文化財年報第二 南佐渡 一南佐渡学術調査報告書一』、1958 年。
- ・佐渡郡教育会編『佐渡年代記』1974 年。
- ・山本修之助編『佐渡叢書 別巻 北溟雑誌 第 2 巻』1975 年。
- ・新潟県『新潟県史 通史編 5 近世三』1988 年。・山本仁、田中圭一、本間滯子『佐渡江戸時代史年表』佐渡史学会、2005 年。